

〈練習問題〉

① 問一 ㉑いでいて ㉒おのが ㉓あわてさわぐ

問二 ㉔イ ㉕ア

問三 エ 問四 るもの 問五 イ

② 問一 イ 問二 ア

問三 エ 問四 エ

解説

① 問一 ㉑ワ行の「ゐ」をア行の「い」に直す。㉒ワ行の「を」をア行の「お」に直す。㉓ハ行の「は」をワ行の「わ」に直す。

問二 ㉔「めでたし」には「立派だ・すばらしい」の意味がある。㉕「いみじ」は「たいそう・たいへん」という意味がある。

問三 ここで鹿が「自慢に思つて」いるのは「角」。

問四 カギカッコの最後を探すときは、「く」という部分に注意する。

問五 本文の文脈を口語訳で確認する。「氣にいらなかった足に助けられすばやく動けたのに、誇った角は逃げるときじやまになった」という気持ちを考える。

《口語訳》

あるとき鹿が、川のほとりに出て来て、水を飲むとき、自分の角の影が、水に映つて見えたところ、この角のようすを見て、「なんとも私の頭に生えている角は、すべての動物の中でも、並ぶものがないほどだ」と、一方で自慢する気持ちが起きた。また自分の四本の足の影が、水底に映つて、たいそう頼りなく細くて、しかも蹄は二つに割れている。また鹿が心に思うには、「角はすばらしいのですが、私の四本の足は氣にいらぬ」と思つてるところへ、どこからか人間の声がかすかに聞こえ、その他に犬の鳴き声もした。そこで鹿は山中に逃げ入り、あまりに慌てさわいだので、生えている木の股に、自分の角を引っかけて、下へぶらりとさがつてしまった。抜こう抜こうとするけれどもどうしようもない。鹿が心に思うには、「なんともつまらないことか、たつた今の私の気持ちは、ひどく誇りに思つた角も、自分を害するものとなり、氣にいらぬかつた四本の枝のような足こそ、自分の助けとなるものだったよ」と、ひとりことを言つてがっかりしてしまった。

この話のように、人間もまたこの鹿と変わらないものだ。大切に身につけていたものは、自分に害をなし、氣にいらぬ思つていたものが、自分の助けとなるものなのだ、後悔することは、まさによくあることなのだ。

② 問一 前文に「軽いものを争つて取つた」とあって、空欄のあとに「これを持つ者はいない」とあるのだから、「重き」が入ることがわかる。

問二 「辞す」は現代でも使用する言葉で、「断る・辞退する・立ち去る」という意味。「およばず」は、ここでは「くしない」の意味。

問三 一語一語、口語訳してみると、「軽い荷物」と「持った」をつなぐための言葉がわかる。

問四 本文の文脈を口語訳で確認する。従者の皆がイソホのどんなところをうらやましいと思つたのかを考える。単に荷物が軽くなったことではなく、そのことを先に見抜いた知恵であることに注意する。

《口語訳》

あるときシャントが旅行にお出かけなさるときに、従者たちに荷物を割り当てた。従者たちは、我先に軽い荷物を争つて持った。さて食べ物が入つた荷物が残つた。その重さをきらつて、この荷物を持つ者がいない。「では」と言つて、イソホがことわるまでもなく、「何事もご主人のためになる仕事なのだから」と言つて、この荷物を持つた。その出発の日の荷物の重さを、「イソホにまさる者はいない」と誰かが言つた。

何日もかけて行くうちに、荷物の食べ物をも使つた。こういうわけで日に日に軽くなつていった。とうとう、たいそう軽い荷物を持つていた。「なんとも先見の明のある賢い者だ」と言つて、イソホをねたまなさる人々もいた。

《三語に注意！》 口語訳は、古文を直接現代の言葉に直しても、意味が通じなかつたり、わかりにくくなつたりすることがある。必要に応じて言葉を補つて訳す必要がある。

〈確認テスト〉

- (1) イ (2) エ (3) ア